

注解『七十一番職人歌合』稿（二十九）

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第六十一番および第六十二番の注解を収めた。

六十一番 山伏 地者

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕十一番右 持者

やとれ月心のくまもなかりけり袖をはかさん神の宮つこ  
なへてには恋の心もかわるらんまことはうなひかりはおとめこ

判云、月、……右、やとれ月とて、袖をはかさんといへることから、上手めきて侍へし。性をえすしてまなはん  
はあしかるへきにや。これは始終いひかなひて侍れば、為勝。恋は、右、た、ありのま、のおしはかりて、題の  
心いたく思入す。左は……為勝。

〔吾吟我集〕

寄山伏恋 待ちかねてひとりねに伏しとらに起き我こそ恋の山伏の行 〔古今夷曲集〕入峰をよみ侍りし

注解『七十一番職人歌合』稿（二十九）

嶺入りや或は野に臥す山臥の難行苦行やせこけの行入行風（をい、とせえん） 笈頭巾かけ出三十六度まで嶺に入るもぞ二世の願行入源俊治（えん、とせえん） 〔人倫訓蒙図彙〕 山伏 修験道ともいふ。役小角（えん、とせえん）是を始む。此の人、額に少しき角のかたちあり。此の人、身に草木の葉を着、口に五穀を断ち、苦修練行して孔雀明王の呪をとなえ、大行の人なるゆへに、役の行者といふなり。

〔非諧職人尽〕 山伏・地しや 峰入りや雲に起臥ときんもあり入重頼（をい、とせえん） 大峰や吉野の奥の花の果て入曾良（をい、とせえん） 初午や役の行者の知らぬ路次入壺月（をい、とせえん） 山ぶしの火の印むすぶ寒さかな入帆歩（をい、とせえん） 山臥のはたけを通る暑さかな入栢庭（をい、とせえん） やまぶしに貫ふて凄き茸かな入佐原 青藍（をい、とせえん） 山ぶしのだまつて通る枯れ野哉入草也（をい、とせえん） 螺貝を吹きさして行く桜哉入雪磨（をい、とせえん） 山ぶしに散るや桜の一つかみ入楼川（をい、とせえん） 峰入りや隣も寐せずめつた町入寥和（をい、とせえん） 物すこの女の経や雪の月入寥和（をい、とせえん） 〔職人尽発句合〕 一番右 山臥 鶯や高天をいづる谷づたひ 回峰の行者のおそろしげなるを、谷の戸出づる鶯の木づたふ風情に、やさしくとりなせし。高間の山の所がら寄せありて、奇験もいちじるしければ、神（左禰宜） 釈ともに、よき持と申すべし。

〔職人尽狂歌合〕 右 寄山ぶし恋 錫杖のふるともやまじ山伏の是非にあいみん納受あれ妹 ……右、下の句よろし。但、ふると申す詞こそ遊女めきて、庶幾せぬ心ちし侍れ。左可為勝。「なにがしよばひすとて、錫杖をしもあやしきものと取りたがへつとて、さがなき人の口にかゝりて候。あら、はづかしや」 / 右 寄山ぶし恋 山伏のふして待つ夜はかひなくて今宵もれいの音づれもせず ……右、かひといふ詞、れいといふ文字もはたらきて、なみ／＼の口つきとはしられず、上手の作者としらる。勝たるべし。 / 右 寄山ぶし恋 いはで恨む心に数珠をもみ切りてときん／＼の胸は山伏 ……右、心に深くこめたるさま、よろし。たゞ、四の句少々聞きなれたる心地すめれば、左を勝とすべくや。 / 右 寄山伏恋 うき事をみたけ精進（きんじん）やいたすらんふみもかよはぬ恋の山伏 ……右、当来の導師いのるさま殊勝なれど、右勝つべくや。 / 左 寄山伏恋 うき恋の山伏と我身をなして目につきまもの、妹を落とさん 左、下の句よくかなひて、たくみなる哥がらなり。 ……左可為勝。 / 右 寄山伏（恋） 思ひつく心きつねか山ぶしのいのれど落ちぬ君ぞつれなき 左右、いづれもよろしく聞こゆ。但、つゞけがら、いさ、か左まさりぬべくや / 左 寄山伏恋 山伏の如く折れど君に又つきものありや落ちぬつれなき 左、よそ人をさしてつき物といへる、おかし。 ……左や勝ちて侍らん。 / 左 寄山ぶし恋 山伏を頼りて祈る耳のはたはら貝をもてふきこませばや 左、下の句おかし。 ……

左為勝。 / 左 寄山ぶし恋 尻に帆をかけ行くいもが心根を恋の湊へ祈りもどさん 左、かつらぎのわたりのふるこ  
と、聞こゆ。……勝劣なくや。〔江戸職人歌合〕二十四番右 山伏 月を見て法螺吹くわざも忘れつつ子になる貝に我  
ぞ驚く 左右共無二申旨一。判云、……右哥、子になるまで月をながめ入りたる、あはれ浅からず。法螺の音すさまじげ  
なり共、猶可レ勝歟。 峰入りに懺悔をしても片恋の憂さより外の言の葉もなし 左右共申一感心之由一。判云、左右とも  
に心深き哥なるにとりて、……右ぞまさり侍るべき。

【本文】

六十一番

あはれわかこ、ろすむへきたよりかな  
ときしもあきの月のみねいり  
たちかへり猶やなかめむあつまちの  
三のおやまの月のたひく

左右ともに、行者の心をよめり。歌さま  
もおなしほとにみゆ。可為持。

せんたちのさんきさむけは我やせむ  
いたの目につくむしのしたかな  
いかにして気うとく人のおもふらむ  
われも女のまねかたそかし

左右の作者、名をあらはさずして、しかも、  
その事ときこゆ。これ又、おなし程にや。

◇

◇

こ、ろ―〔類〕心 たより―〔類〕便

ときしもあきの月のみねいり―〔類〕時しも秋の月の峯入  
たちかへり―〔類〕立かへり あつまち―〔類〕東路

せんたち―〔類〕先たち せむ―〔類〕せん

かな―〔忠〕〔明〕〔類〕哉

気うとく―〔類〕けうとく おもふらむ―〔類〕思ふらん  
われ―〔類〕我

その事と―〔類〕そのこと、これ―〔類〕是

山ふし

これは出羽のは黒山の客僧にて候。三つお山さんけい申候。

地しや

あら、おんかなく、二所みしまも御らんせよ。



山ふし―〔白〕〔類〕山伏〔忠〕六十二番山伏  
これ―〔白〕〔忠〕〔類〕是

三つお山―〔尊〕〔明〕三のお山〔白〕〔忠〕〔類〕三のお山に  
さんけい―〔白〕〔忠〕〔類〕参詣

みしま―〔白〕〔忠〕三しま

〔語注〕

山伏は、山岳仏教の一派、修験道の行者。山中に入って難行苦行をして法力を得、祈祷や占卜を行う。

地者の実態は明らかでない。『鶴岡放生会職人歌合』十一番右の持者は、本職人歌合の地者と同じかと思われるが、相人と番われており、月の歌に「神の宮つこ」の言葉が見える。また、本職人歌合の月の歌に「東路の三つのお山」とあり、その判詞に「行者」と見える。これらのことなどから、これも山伏に類する宗教者であったと思われる。なお、『鶴岡放生会職人歌合』の絵は、桂巻、小袖の女性の姿であるが、口髭を生やしており（松下本による）、本職人歌合も、絵は女性のごとくであるが、恋の歌に「われも女のまねかたぞかし」とあり、実は男のようにも思われる。

◎わかこゝろすむへきたより 美しい月が、自分の心が澄むよすがとなる、というのである。「澄む」に月が「澄む」意を掛ける。

◎あぎの月のみねいり 「峰入り」は山伏が大和（現奈良県）の大峰山に入って修行すること。「秋の峰入り」とい

う用例は管見に入らないが、秋期、吉野から大峰山に入り熊野へ出る逆峰のことを、春季、熊野から吉野へ向かう順峰と区別していうのであろう。その「峰入り」に、月が峰に入ることを言い掛ける。ただし、月の「峰入り」は、勿論造語。

◎「たちかへり猶やなかもむ 引き返してまた眺めようか。「立ちかへり又もきて見む松しまやをじまのとまや浪にあらずなへ俊成」(新古今、十、羈旅歌)など、同想の歌は多い。

◎あつまちの三のおやま 東路の三つの御山。羽黒山・月山・湯殿山の出羽三山をいうのであろう。『新大系』は、「三所三島すなわち伊豆山権現・箱根山権現・三島大社をさす」とする。

◎月のたひくく 三つの御山の月をたびたび眺めたい、というのであろう。三つの御山にたびたび参詣したいという気持ちを含ませるか。

◎「せんたちのさんきさむけは我やせむ 「先達」は「せんだつ」とも言う。峰入りのときに他の山伏の先導を勤めるなどする、リーダー格の山伏。「慚愧」(懺愧)とも書く)・「懺悔」はともに仏教語で、前者は、自分の行いを反省して罪を恥じること、後者は、罪を告白して許しを乞うこと。しばしば、このように「慚愧懺悔」と続けて用いられる。上句全体の意味は、未考。『新大系』は、懺愧懺悔を「(恥)け出し者の(私)が先達に代つてしよう」と解する。

◎「いたの目につくむしのしたかな 「いた」は、熊野神社の巫女のことか(角川古語大辞典「いた〔板〕」の項)。「目につく」は、(いたが)目にとまる意か。「つく」に山伏の縁語「憑く」を掛けるか。「むしのした」は「桌の下」で、桌の垂衣たれぎぬの下、つまり、垂衣に覆われた女の顔の意か。全体として、桌の垂衣を付けた熊野巫女の顔が目にとまる、の意か。「みくまののむなしき」ことはあらかじめむしたれたのはおふあゆみは」(山家集、下)の「むしたれた」が、桌の垂衣を付けた熊野巫女を意味する(日本国語大辞典「むしたれた〔桌垂板・板板〕」の項・角川古語大辞典「むしたれた〔板板・苧垂板〕」の項)とすれば、この解釈の傍証となるかもしれない。『中世職人語彙の研究』は、「むしのした」は「虫の舌」すなわち「蛞なめくじ」のことであり、放蕩者の山伏の比喩と解する(「むしのした」の項)。「新大系」も同様。

◎いかにして気うとく人のおもふらむ 「氣疎し」は、対象が不気味で、それから離れたい気がするさま。通常、歌に用いる言葉ではないが、こゝは、地者が一般の人から気味悪がられていたことを反映するのであろう。

◎女のまねかた 「まね形」は、形をまねたもの。勿論、俗語。こゝは、形だけでも女にちがいない、というほどのニュアンスか。地者は実は男か。

◎名をあらはさずして、しかも、その事ときこゆ 作者の名が直接分かるような言葉を用いていないで、しかも、それぞれのことを詠んだと分かる、と褒めるのか。「その事ときこゆ」は、歌合判詞に、「二月や、とさだかにうちいでずとも、その事とはたがふまじくきこえ侍るを」(前撰政治家歌合、二十一 番判詞)などの例がある。

◎これは……さんけい申候 謡曲「葛城」の、「これは出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。われこの度、大峯・葛城に参らばやと存じ候」などの、山伏の名乗をまねた言葉か。

◎出羽のは黒山 出羽国(現山形県)の羽黒山。修験道の霊場で、羽黒派山伏の根拠地。

◎客僧 諸国を行脚する僧。特に、山伏をいう。

◎三つお山さんけい申候 「三つ」は、他の諸本は、「三の」。底本の誤写であろう。また、白石本・忠寄本・類従本は、「三のお山」と、「に」を伴う。この方が意味が通じやすい。こゝの「三のお山」は、熊野三山、すなわち、紀伊国(現和歌山県)熊野地方にある、熊野坐神社(本宮)・熊野速玉神社(新宮)・熊野夫須美神社(那智)の三社のことであろう。古来、修験道の霊場とされ、山伏の参詣も多かった。これから熊野三山に参詣する、というのか。あるいは、すでに参詣してきた、というのか。

◎あら、おんかなく 未考。「おんかなく」は、「唵呼嚕呼嚕」(薬師如来を拜むときに唱える真言の呪文)などの訛つたものか。『新大系』は、「おっかな、おっかな」と解するが、いかが。

◎二所みしまも御らんせよ 「二所」は、二所権現のことで、伊豆権現(静岡県熱海市)と箱根権現(神奈川県箱根町)。「三島」は三島神社(静岡県三島市)。「御覽ぜよ」は、私の偽りない心をご覧ください、の意。神々に誓いを立てているのである。

〔繪〕

山伏は、兜巾、篠懸、袴姿で、首に結袈裟ゆいざをかけ、脚半、草鞋を履く。右手に持った鉞やをかたげ、左手に数珠を持つ。白石本、類従本は、篠懸、袴の模様を描かない。

地者は、垂髪で茫茫眉。小袖の上に打掛を羽織り、草履を履く。首に数珠をかけ、背に掛け帯を結ぶ。右手は何かを指さしている体。

〔参考〕

○ 三とせ待つ間の中のくるしき

山臥は那智のみ山をすみかにて

△後土御門天皇▽

〔新撰菟玖波集〕

○ 山伏の打つ火の影も暗き夜に

神の光の高き三熊野

△梁心▽

〔初瀬千句、三〕

○ 我が国はとを山臥の旅ごろも

貝ふきならしうつるとき時

△原秀▽

〔顯証院会千句、五〕

○ 髪のまままで鬼はをそろし

つかへ来る法の山伏眉白く

△梵揚▽

〔美濃千句、七〕

○ 山ぶしの身を許しなくつとめきて

奥なを深く分くる葛城

△承世▽

〔表佐千句、三〕

○ み熊野や苔路の旅寝目も合はで

涙もよほす行ひの声

〔三嶋千句、四〕

○ 葛城や時ぞともなく降る雪に

遠山ぶしのことやわぶらん

△泰諶▽

〔池田千句、六〕

○ 羽黒山にてうそをこそ吹け

蜂の子のわる巢の中を出羽の国

(竹馬狂吟集)

○ ふくもふかれずするもすられず

山伏の貝割れずの緒は切れて

(犬筑波集)

○ 行者は弓を持ちて出でけり

飛ぶ鳥の祈れど落ちぬ空を見て

(同)

○ 山伏の来る足音や高からん

舂離れたる役の優婆塞

(同)

○ 赤きは酒のがぞ、鬼とな思しそよ、恐れ給はで、我にあひ馴れ給はば、興がる友と思すべし、我もそなたの御姿、うち見には、うち見には、恐ろしげなれど、馴れてつぼひは山臥

(閑吟集)

○ この歌のごとくに、人がましくも言ひたつる、人は中々わがためは、愛宕の山臥よ、知らぬ事なたまひそ、……

(同)

○ 九識の窓の前、十乗の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄ます所に、案内申さんとは如何なる者ぞ。

(謡曲「葵上」)

○ それ山伏といつば、役の優婆塞の行儀を受け、その身は不動明王の尊容を象り、兜巾といつば五智の宝冠なり、十二因縁の髻をすゑて戴き、九会曼陀羅の柿の篠懸、胎蔵黒色の脛巾をはき、さて又八目の藁鞋は、八葉の蓮華を踏まへたり、出で入る息に阿吽の二字を称へ、即身即仏の山伏を、ここにて討ちとめ給はん事、明王の照覽計り難う、熊野権現の御罰を当たらん事、立ちどころに於いて、疑ひあるべからず

(謡曲「安宅」)

○ それ山伏といつば、山に起き伏すによつての山伏なり。……兜巾といつば、布切れを一尺ばかり真つ黒に染め、むさと髻をとつて戴くによつての兜巾なり。数珠といつば、いらたかの数珠ではなふて、むさとしたる数珠玉を取り集めて、からりからりとからめかし、一折りこそは折つたれ、ぼろおん、ぼろおん、ぼろおん、ぼろおん、……いろは



にはへとちりぬるをわか、橋の下の菖蒲は、たが植へた菖蒲ぞ、折れども折られず、……いかに悪心の犬なりとも、明王のさつくにかけて祈るならば、などかなつかでかなふまじひと、ほろおん、ほろおん、ほろおん

(虎明本狂言「犬山伏」)

○貝をも持たぬ山伏が、貝をも持たぬ山伏が、道々うそを吹かふよ。是は出羽の羽黒山の山伏でござる。大嶺葛城を致いて、駆出でござる。急いで本国へ帰らふ。惣じて我らの行ほど、難行はござらぬ。明け暮れ山野に起き伏して、岩木を枕として、苦行を致す。去りながら其の奇特には、飛ぶ鳥成り共目前に祈り落とすが手柄でござる。

(虎明本狂言「ねぎ山ぶし」)

○妖術師は、われらにおいては罰せられ制裁を受ける。一向宗イフシユウの僧侶ヤマブシと山伏とは、自分たちが妖術師であることに満足している。

(日本覚書、四)

〔職人尽〕

〔五番本東北院職人歌合〕 四番左 巫

ひくしめのうちへないりそ夜半の月さはかり雲のこゝろゆかぬに  
君とわれくちをよせてそねまほしき鼓もはらもうちたゝきつゝ

月

左右ともに優に聞え侍。……右勝にや侍らん。

恋

左の恋の心あさからず。……持と申へし。

〔十二番本東北院職人歌合〕 五番左 巫女

おほかたのさはりもしらす入月にひくしめなわをこゆないめく

左哥、めつらしくとりなされたり。但、あまりに風情をめぐらして、月に心ざしなく聞ゆ。……依右可為勝。

〔鶴岡放生会職人歌合〕 神主（判者）

ひくしめのなかき夜すからななむれは神さひにけり袖の月かけ

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 十一番左 神子

恋せじと神の御前にぬかつきてさむくのこめの打はらふ哉

〔道増誹諧百首〕 神楽 舞衣持たざる御子のあさくらやただきのままの神楽也けり

ふれる神楽の鈴口を喜ぶみこも宜禰がならはし 〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 巫女 弦音に問ふ口占をまかせけり梓の弓

〔貞徳百首狂歌〕 神楽 くらがりに

のはづは合はねど 〔吾吟我集〕 神祇 帰るさもいさしら山や神主の馳走ぶりよき客人の宮 〔職人絵合詩〕 五番 神子  
 巫覡祝詞託神教 肅風飄袖舞踏貌 人皆有智不可誣 河伯猶畏西門豹 〔古今夷曲集〕 百首の中に 烏帽子きて神の御前  
 にひだりをり右をりしつづ見ゆるはふりこ八入安▽ 題しらず 千早振る神につかへてあらよねのこぼれを拾ふつづ  
 をねぎ哉八徳元▽ 〔訓蒙図彙〕 巫 かんなぎ。女之事ル神二者也。在ル男二曰覲ト。祝 はふり。廟祝也。祭ニ  
 主ニ贊詞ト者也。 〔人倫訓蒙図彙〕 神道者 日本は神国なれば、神道をもて国家を治むる法あり。本朝欽明天皇の御  
 代に仏法わたりてより、神道おとろへて、伝わる学者まれなり。神書數百ありといへども、入鹿が逆心の比滅せしとかや。  
 其の後、天武天皇の皇子一品舍人親王、日本記を製作あり。此の中、神代の二卷、本朝の明記たり。今唯一神道と号する、  
 是根元の神道なり。両部習合といふ物は、仏菩薩をもつて神の垂跡と立つる也。 〔百人女郎品定〕 神職室 社務神主  
 禰宜祝部氏はかり社人の別あり。公家にあらず、地下也。武家にあらず、長袖なり。神社は万民上々の祖神たるにより、上々  
 は政道にいとまなく、下々は渡世にいそがはしきゆへ、氏人をして祭らしむ。出家の墓地を守に同じ。其の妻たるは平人  
 にひとし。しかれども、伊勢八幡加茂のたぐひは、天子將軍家へも女を奉れば、采女の例に同じと也。 神子 巫女  
 は、唐も日本も、神を祭る女にて、夫を祝部といへり。吾が朝にては倭姫の余風也。 〔狂歌ますかがみ〕 禰宜 幣を持  
 ちて祓をなす体 恋せじと御手洗川に出は出ても虚言になり平浮名流るる 〔狂歌活玉集〕 巫女恋 我が恋を神も見とを  
 し給ふかやつつしみ敬ふ身こそつらけれ 〔誹諧職人尽〕 ねぎ・かんなぎ 冬ざれや禰宜の提げたる油筒入落梧▽ 留守  
 のまま荒れたる神の落葉哉八芭蕉▽ 禰宜達の馬も白いか神迎ひ八世田谷 雨眠▽ 門寒し高天原が朝袴八夢和▽ おも  
 しろき神樂乙女の化粧かな八望一▽ むつかしき拍子も見えず里神樂八會良▽ ふるかれや神樂拍子に神樂声八路通▽  
 駄賃馬に夜は明けにけり里神樂八和尹▽ ほととぎす神樂の中を通りけり八女礼▽ 気色あり顔見せ月の雇ひ神子八夢和▽  
 〔今様職人尽歌合〕 神道者 八重鎌のどかまとよめる禰宜の身もわが恋草は刈るよしぞなき ……右、祓へのことば  
 をとりて、恋草を刈らんよしなしと嘆かれし、これもまたかうがうしくたふとし。されど、この八重鎌のとがま、兵介が  
 太刀の切れ味（左歌）にはたぐふべうもあらず、左、ろなう勝と申すべし。「祇園の神ははやし聞こゆるを好ませ給ふな  
 り。よいよいとはやし奉れ」 照る月にさはれる天の八重雲をしなどの風よ吹きはらへかし ……右、式の大はらへ

の詞に、科戸之風乃天之八重雲<sup>手</sup>吹放事之如久とあるを、月にさはれる雲にくらべて、吹きはらへと続けられたる、げに神道家の言とぞきこゆる。この一番、よきもちとやまうさん。 / 咲き遅る花鎮めせん葛城や高天の原にかかる白木綿 / 雨の宮風の宮をばいとふらん伊勢桜咲く神主<sup>かみ</sup>が庭 / いなります山の花にははふり子も雲か雪かと化かされてみむ / 月を見て老いとなりたる神道者腰をかがめてぬかづきやせん / 神主よ邪魔する月の村雲をしなどの風にはらへとぞ思ふ / ゆふだすきかけてぞはらふちり雲も高天が原の月の御鏡 / ねぎ事を心にこめて振る鈴のなるならざるに恋ひまどふかな / うち流す君が心の麻の葉に思ふことをば告げもやられず / 下紐の解けぬ思ひや神なぎは結ぶの神を祈りよくして / いたづらに世をすめるぎの神道者ふりゆくものは鈴と身の上 / たましひの太祝詞よむ我が身すら世の憂き事ははらひかねけり / 寧王の昔もかくや神道者花にも鈴を振りて出でぬる / このごろは祝詞をあぐる神主もはらひきよぬ花の木のもと / 八雲立つ出雲の神も空だのめ邪魔な人目は曇らせもせず / 仏法の教珠はよそなる神道者手をおしもみて頼む仲だち / いとどなほ立ちそふ胸の八重雲や中臣祓へ口に読めども / 神つ世の道は知れども憂き恋の常闇にのみ迷ふすべなき [職人尽発句合] 一番左 欄宜 世を照らす神路の山の鏡餅 世を照らすとうち出だせしは、げに天地の中にとある有情非情の、いづれかこの神のめぐみにもるはあらじと、ほこりかなることとはりなれ。……神釈ともに、よき持と申すべし。 / 六十三番左 巫女 おもひ草かむなぎが袖のふり合はせ 立ち舞ふかんなぎが袖のふり合はせに、尾花がもとのおもひ草やみだれけむ。……かむなぎに心ひかるれ。 [職人尽狂歌合] 左 寄欄宜恋 顔と顔を宮居の欄宜のゆふだすきはづして逢はぬ人ぞつれなき 左、大方よろし。……持とすべくや。 / 左 寄欄宜(恋) 君に心かけまくも朝夕しでに忘れて恋ふるおのが神職 左、今すこし下の句言ひおほせぬ心ちす。……此の間注、欄宜どこの負にて侍るべし。 / 右 寄かんなぎ恋 ひたすらに祈りまいらせ候と忍びてぞ書く文のかんなぎ ……右、結句の続きよろし。勝劣なくや。 [近世職人尽絵詞] 巫 「よその姉君見よ。よきあね君ぞ」「あな、うつくしのみこや」 [略画職人尽] 暁は烏帽子のからすぬかづきて朝日の宮に響く柏手 [難波職人歌合] 下五番左 神道者 さく鈴の音にもなくなり小男鹿の八つの耳をば振り立てて聞け 右のかたうと云、延喜式の祝詞の巻に出でたるには、馬の耳の事こそあれ、さをしかの八つの御耳を振り立ててと云ふことはなし。されば、物知り

人たちのあげつらひ多きことなるを、是は鈴振る事まで詠み入れて、いみじき俗神道と云ふべし。左方答、今の人なれば則ち今の儘に、中臣祓も今の本によれるなり。……判に云、左の歌、右のかたうどの論は、げにげにしくことわりに叶ひてよくいはれたり。かりそめにも神の道を唱へむには、古へを学びて今に明かし、すめらみ国のたふとき事を、世にいちじるくもて伝へんこそ、おのづから此の大やまとに生まれしかたじけなきを報い奉るかたはしとも云ふべけれ。やくなき儒に媚び、仏にへつらひて、しひて道を売らむとする故に、中々にもてそこなひて、やうやうに我が一口を養ふばかりの、はかなくあぢなき道とは成りたるにこそあれ。さはれ、今は世渡りなれば、是をいかがはせん。はた、さる心を種として詠み出づる歌なれば、是もいまさら咎むべきにはあらざるべし。右のうた、……こよなき勝といふべし。 / 下二十一  
一番右 巫女 我と我が口寄せて聞くわざもが人の心を奥も知るべく、左の方人云、聖徳太子を八つ耳のみこと云へりし事はあれども、我が口を寄せて現なく成りたらん身の、我が耳に聞かむ事、有るべくもあらざるをや。右方答、さればこそ、さるわざもがなと嘆きたるなれ。判に云、……右の歌、人の心の疑はしさに、我が口寄せて聞かまほしとは、いともをさなう哀れにおもひよられけるかな。歌はかかる姿こそめでたけれ。されば、左にも猶たち増さりて、勝たりと云ふべし。

【本文】

六十二番

さいはるゐやたかまのはらのあきの月

とかてふとかのくもはらひませ

神かたや鈴ふりたつるこゑまで

月すみわたるさとかくらかな

左哥、なかつ祓といふ詞を、やかて月の

祈によめる、興あり。右は、神哥と神樂と、

さいはるゐ―〔忠〕〔明〕〔類〕さいはい たかまのはら―〔類〕高天の原  
あき―〔類〕秋  
くもはらひませ―〔類〕雲払ひませ  
神かた―〔尊〕〔白〕〔明〕神うた〔類〕神哥 こゑ―〔類〕声  
すみわたる―〔明〕をみわたる〔類〕澄わたる さとかくら―〔類〕里か  
くらかな―〔明〕〔類〕哉  
左哥―〔類〕左歌 なかつ祓―〔忠〕〔明〕なか臣祓〔類〕中臣祓

おなしこと葉なるへし。歌合には故実  
なきに似たり。仍、左可勝。

わか恋をいのもと人のき、やせむ

さ、やき事にのと申さん

かけおひのなかきちきりのかひもなし

しめのほかなる人となりつ、

右哥、よしあるに、たれとも、左、さ、やき

こゑの、と、金玉ときこゆ。左猶可勝。

◇

◇

ねき

たかまの原に

神と、まり

まし／＼て

かんなき

柿はや、たちまふ

そでのをい風に



こと葉なるへし―〔類〕言葉成へし  
なきに似たり―〔類〕なきに、たり

わか恋―〔類〕我恋 せむ―〔類〕せん

さ、やき事―〔類〕さ、やき声

かけおひのなかきちきり―〔類〕かけ帯の長き契り

ほか―〔類〕外 なりつ、―〔類〕成つ、

ねき―〔白〕衿宜〔忠〕六十二番 衿宜

柿は―〔明〕〔類〕神は たちまふ―〔白〕〔忠〕立まふ

そて―〔白〕〔忠〕〔類〕袖 をい風―〔尊〕〔明〕〔類〕をひ風〔白〕〔忠〕追風

〔語注〕

衿宜は、本来、神主の下、祝はかりの上に位する神職をいうが、俗に神職の総称としても用いる。ここは後者と考えてよ  
からう。

巫は、神に仕え、神楽を奏したり、神託を伝えたりする者。多くは女性。みこ。

五番本『東北院職人歌合』四番左、および、十二番本『東北院職人歌合』五番左が巫（巫女）、『鶴岡放生会職人歌合』の判者が神主。

◎さいはるや 「再拜」は、神などに対して二度礼拝する意で、神仏に祈願するときに唱える言葉。ここは、「再拜々々、高天原仁神留坐須……」（氏経卿記録入神道大系 古典註釈編 中臣祓註釈▽）などのごとく、「再拜々々」と唱えてから祝詞を読む礼式を模して、「高天原の」と続けるのであろう。「再拜や」と「や」を挿んだのは、あえて和歌の初句らしい形式を整えるためであつて、そのことが滑稽な効果を生む原因となつている。もつとも、ここは、五番本『東北院職人歌合』一番右、陰陽師の月の歌、「再拜や高天の原にすむ月にあまの八重雲かからずもがな」をまねたか。

◎たかまのはらのあきの月 「高天原」は、前項にも見ることく、「中臣祓」などの祝詞に、「高天原仁神留坐……」と常套的に用いられる言葉。天照大神を支配者とする天つ神が住むとされる天上界。その「原」に照る月、という見立て。

◎とかてふとかのくもはらひませ 判詞にいうごとく、吉田流神道の「中臣祓」に、「罪止云罪、咎止云咎者、不在止、科戸乃風濃、天乃八重雲乎、吹放津事濃如久、……罪止云罪、咎止云咎波、不在物於止、祓賜伊清賜登、申事乃由於……」（祓品々秘書入神道大系 古典註釈編 中臣祓註釈▽）などとあるに基づく表現。「咎てふ咎」は、あらゆる咎。「雲」は、咎の譬え。この譬えも、「中臣祓」の「天乃八重雲乎、吹放津事濃如久」からの連想であらう。「祓ひ」に「払ひ」を掛けらる。あらゆる咎を祓うように、月にかかる雲をお払いください。

◎神かた 底本・忠寄本に「神かた」とあるが、「神うた」の誤写であらう。尊経閣本・白石本・明暦板本は「神うた」、類従本は「神哥」。神に関する歌で、ここは、神楽歌を指すのであろう。

◎鈴ふりたつるこゑまでも 「声」は鈴の音。全体として、下句の「澄み渡る」に続くか。やや無理な語法。

◎月すみわたるさとかくらかな 「すみわたる」は、忠寄本は「をみわたる」とあるが、誤写であらう。「澄み」に

鈴の音が澄む意を掛けるか。「月澄み渡る里」から「里神楽」と続ける。「里神楽」は、宮中の内侍所で行われる神楽に對して、民間の諸社で行われる神楽をいう。

◎なかつ祓 「なか臣祓」の誤写であろう。忠寄本、明曆板本は「なか臣祓」、類従本は「中臣祓」。「中臣祓」は、六月晦日や大嘗会などの際、罪や穢れを清めるために行う祓え。また、そのときに読む祝詞。古く中臣氏がつかさざつたのでこの名がある。

◎興あり 「興」は、歌論用語で、歌の趣向のこと（三十二番語注「興なきにあらず」の項参照）。

◎神哥と神楽と、おなしこと葉なるへし 「神哥」と「神楽」とは類義語でよくない、というのである（二十九番語注「なかむるとみるとはおなし事にや」参照）。

◎歌合には故実なきに似たり 「故実」は、心得。歌合というものに対して心得がないかのようだ（二十二番語注「哥合の故実なきにや」の項参照）。

◎わか恋をいのると人のきゝやせむ 自分の恋の成就を祈っているのだと、人が聞かないだろうか。事実、自分のために祈っているのであるが、それを人に知られることに對する不安な気持ち。加えて、他人のために祈るべき欄宜が、自分のために祈っていることのおしろめたさも込められていよう。

◎さゝやき事にのと申さん 「さゝやき事」は、類従本は「さゝやき声」。これでも意味は通じるが、誤写であろう。「囁き事（言）」は、囁き声で物を言うこと。「のと」は、「のり」と（祝詞）の促音便「のつと」の促音無表記形であろう。ここは、恋の成就を祈る祝詞。本来、莊重な声で申すべき祝詞を、人に聞かれないように、ささやき声で申そう、という滑稽。

◎かけおひの 「掛け帯」は、女性が社寺参詣の際、齋戒の標として、胸から掛けて背で結んだ赤い紐。巫の縁語。「掛け帯の」で、枕詞的に下の「長き」に係る。

◎なかまきざきり 行く末長くと交わした約束。

◎しめのほかなる人となりつゝ、「標の外」は、神社などの神聖な地域の外、を原義とし、人の心が隔たっているこ



とをいう。「木綿かけて思はざりせばあふひ草標の外にぞ人を聞かまし八上東門院」(玉葉集、十四、雑歌一)などの例がある。ここは、巫の縁で用いた。相手が冷たい人となつてしまつて。

◎よし 歌論用語。歌合の判詞に用いられ、歌合の歌としてふさわしい、優れた歌であることを積極的に評価する語(和歌大辞典)。

◎金玉 優れた表現(三十九番語注「金玉をみかきいてたり」の項参照)。

◎たかまの原に神と、まりましゝて 高天原タカマノハラ神留坐。「中臣祓」などの祝詞に多用される常套句。「留」については、賀茂貞淵『祝詞考』は、(カン)ツマリと訓むべきだとするが、「高天原タカマノハラ神留ト、マリ坐須」(神宮文庫蔵『中臣祓』八神道大系 古典註釈編 中臣祓註釈)、タカマノハラニカミト、マリシテ「高天原タカマノハラ神留坐」(祓品々秘書)などに見ることく、トドマリトの訓みも行われていたと思われる。「神留まる」は、神が鎮座する意。

◎榊はや、たちまふそでのをい風に 「榊」は、明暦板本、類従本は「神は」とあるが、誤写であろう。神楽歌の一節であろう。伊勢神宮の神楽歌を収めた天文本文『神楽歌』に、「いや、さかさまふたちまふそでのをいかぜに、いや、なびかぬ神はあらじとぞおもふ」(神道大系 文学編 神楽歌)、同じく『神遊歌集』に、「いや、榊葉に立まふ袖のおい風になびかぬ神はあらじとぞおもふ」(同)とある。この神楽歌の原歌は、『金葉集』所収、康資王母の歌「さかきばやたちまふ袖のおひかぜになびかぬ神はあらじとぞおもふ」(金葉集、四、冬部)。なお、『顯証院会千句』七に、「散らすは幣か花の咲ころ／宮人の袖の追ひ風うちかほり八忍誓」の付合がある。「榊」は、ツバキ科の常緑垂高木。古くから神木とされ、枝や葉を神前に植えたり、手に持つて神楽を舞つたりする。「追風」は、衣類にたきしめた香りを吹き送る風。

### 〔絵〕

禰宜は、立烏帽子、狩衣、袴姿で、右手でしで四手を垂らした榊をかたげる。

巫は、垂髪で茫々眉。打掛の腰の部分の小袖の帯に挟むか。右手に鈴を持ち、左手を掲げて、神楽を舞う。

【参考】

- 庭火をたきてうたふ榊葉  
鳥の音もやたびの霜のさゆる夜に
- 歌ふ榊葉の庭火たたくころ  
霜寒し夜や明けがたに成りぬらん
- たくや庭燎のさ夜ふかきかげ  
榊葉を歌ふたもとに霜さえて
- 踏む跡見ゆる霜のふる道  
しらがなる神の宮人沓はきて
- いかで昔をしのびかへさむ  
下る世のあまつ榊葉の舞の袖
- 夜は更けぬこの御榊葉の男山  
たてりと見ゆる今の舞人
- この玉ははき持てるみやつこ  
乙女子が手にとる鈴の声聞きて
- くしとりもてるきねが黒髪  
神に引く馬屋の長もあるべきに
- 春日野やその神人のから衣  
賢木葉うたふ夜は更けにけり
- 神に人誓ひかけてや祈るらん  
かつらすそ引くきねがよそほひ

△行助▽

(新撰菟玖波集)

△実遠▽

(同)

△公藤▽

(同)

△宗砌▽

(同)

△宗砌▽

(同)

△盛理▽

(紫野千句、三)

△定阿▽

(同、五)

△周阿▽

(同、六)

△相阿▽

(同、八)

△救済▽

(同、九)

- 月は猶秋の中空貞かにて  
八幡の祭いそぐ宮人
- 古りぬる宮ゑ上久にけり  
鈴ならず神楽男は翁にて
- そこ無く歌ふもしるし夕神楽  
ゆふかけそへて猶祈るなり
- 住吉やきねがひれふる神遊び  
あけし岩戸の庭火をぞ焼く
- 散らすは幣か花の咲くころ  
宮人の袖の追ひ風うちかほり
- しらがなる神の宮人杳はきて  
かぶりいただきいづるはふり子
- 初雪しろく見ゆる神杉  
此の宮に立てるはふり子年古りて
- 暁の神楽男の袖さびて  
山は八幡にかかるありあけ
- 星まつる庭のともし火ほの見えて  
贄には鹿をすはの宮人
- ねぎごとを黄楊の小櫛の占まさし  
もの言ひ交はすきねが唇
- 人もつくなる歌の一節

△生阿▽

(初瀬千句、二)

△宗砌▽

(文安月千句、二)

△良珍▽

(同、三)

△竜忠▽

(顕証院会千句、二)

△忍誓▽

(同、七)

△金阿▽

(宝徳四年千句、四)

△宗砌▽

(享徳千句、二)

△心恵▽

(同、九)

△宗砌▽

(同)

(異体千句、二)

笛竹のねぎごともし神遊び

(同、七)

○ 鶏も声うちそふる小夜神楽

かへす乙女の袖もなつかし

△ 蘭仲▽

(美濃千句、九)

○ 節もひとつに歌ふ声々

夜神楽や神に祈りの猶しげし

△ 慶珍▽

(因幡千句、三)

○ 一葉をもあだになさじの神慮

嵐はいかに秋の宮人

△ 印孝▽

(永原千句、六)

○ 神主どのや弓を持つらん

吉田より追はれて逃ぐる鹿の谷

(竹馬狂吟集)

○ あの宮でどうこの宮でどう

乗りつけぬ馬に神主のけぞりて

(犬筑波集)

○ 弓の弦こそほほけたりけれ

この巫女の前しどけなく口寄せて

(同)

○ 四月初卯に、住吉にかしはでの神事とて、社司祝<sup>はかみこ</sup>神子たちまで、手に柏の葉を持ちて、無言にて神輿の御伴申

さる。その時しも参詣し侍れば、

ほととぎす鳴けかしはでの神事かな

と申しければ、ある祝、

日も卯の花の白いはふりこ

かの御社に白はふり、黄はふりとてあるなり。

(誹諧連歌抄)

○ ……添うてよいもの小巫女の肌は餅肌、なにとおしやれど小巫女の肌にわ飽かぬぞ、一夜添ふては七日もつれる小

巫女の肌はよい肌

(田植草紙)

○我も先祖は神子であつたと申すほどに、目出度うちと袖神樂を参らせうと存ずる。 (天理本狂言「石神」)

○是は伊勢の禰宜でござる。毎年此のころ諸国へ旦那まはりをいたす。急いで参らふと存ずる。是は申すに及ばぬ事なれども、惣じて天照大神の有り難き事は、余も四方に隠れも御ざなひに仍而、国々在々所々に信仰仕り、我らごとき者までも、いづかたへ参れども御馳走なざる事でござる。 (虎明本狂言「ねぎ山ぶし」)

○是は出雲の大社に仕へ申す神職の者で御ざる。去る程に、今日は節分で御ざる程に、神前へ参らふと存ずる。又、いち殿も呼び出だし、み神樂をも参らせらるるやうに、同道致いて参らふ。 (虎明本狂言「のつとうかぐら」)